ディメンションW 荊の回収屋

ユーベル

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦２０７２年、人類はＸ＝現在／第一次元・Ｙ＝未来／第二次元・Ｚ＝過去／第三次元に続く第四の次元軸『Ｗ＝可能性』に存在する無尽蔵のエネルギーを取り出すことに成功した。

その装置の名称は次元間電磁誘導装置。

通称「コイル」。

「コイル」の発明により、旧来の発電・送電システムは過去の遺物となり消えていった。

だが、「コイル」とは別に、徹底的に秘匿された無尽蔵のエネルギーを取り出すことが出来るシステムが存在した。

「意思を持った電気信号」。

「人の意志」ともいうべき「莫大な電気信号」が記述された電気、Ｗｉｌｌ，ｏである。

これは、Ｗｉｌｌ，ｏを扱う少女と違法コイルを回収する男とアンドロイドの話である。

「私１８だから少女って歳じゃないんだけどね」

目　次

原作前の一波乱 ―― 1
始まりの足音 ―― 6
依頼 ―― 9
日陰街 ―― 12

原作前の一波乱

……あの時

……私は

……13歳だった

百合崎士堂博士が組織した超人部隊『グレンデル』。

その最後の作戦『アドラスティア強襲作戦』。

イースター島北部にある研究施設への電撃強襲制圧作戦であった。

最も、生き残ったのは私を含めた《獣》の称号を持つ3人だけだったけど。

《烏(レイブン)》の称号を持つ私、リア・カークライト。

《山猫(リンクス)》の称号を持つアルベルト・シューマン。

そして、《狼(ウルフ)》の称号を持つマブチ・キョーマ。

キョーマはこの時の事を覚えていな……

違う……

覚えていないんじゃない…

記憶の奥底に封じ込めたに過ぎない。

……その記憶が必要になる日が来ないことを祈る事しか出来ない。

私としては、せっかく心血注いで造った特殊ボディがお役御免になったのが一番のショックだったね。

いや、キョーマの方がダメージ大きいか。

何せ、奥さんの頭部がイースター島崩壊と同時刻にコイルごと消失したのだから……。

あれから半年。

キョーマはあの事件以来極度のコイル嫌いになった。

アルベルトはニューテスラエナジーの次元管理局ＤＡＢ（ダブ）に入った。

私、転生者リア・カークライトは現在……

「ちょ、おい！リア！離せ！」

引きこもってたキョーマの首根っこを引っ付かんで……

「本当に使えるんだろうね？コイツ」

セントラル４７の魔女マリーと共に……

「使えなきゃこんなところまで引きずって来ませんって」

中国にまで来ていた。

ｓｉｄマリー

アタシはマリー。

セントラル４７のコイル回収屋の斡旋とカフェテリアを営んでいる。

今回は大きな仕事が入ってきたんだがねぇ……。

はあ。

２周間程前に大量の違法コイルを持って尋ねてきたリアって小娘と共に中国汲んだりまで来たわけだが……その途中で何を考えてかみすぼらしい男を拉致して来たんだよ。

何でもかつて同じ特殊部隊にいた同僚らしいけど……本当に使えるんだろうねぇ？

何せ、今回の相手は雀上将が金にモノを言わせて作らせた最凶最悪の軍用アンドロイド『銅雀台の悪夢』。

何でも宝物庫を守っており、現在までに軍人４８名、一般人６名、ロボット１１体が犠牲になっているそうだ。

かなりの強敵だよ。

大丈夫なのかい？

「１００体のシールド持ちが守っている訳じゃないから楽な仕事よ。グレンデルの獣なめんな」

「おい、そろそろ離せよ。首絞まりかけてるんだが…」

「あ、ゴメンゴメン」

緊張感無いわね……。

所で時間はどれぐらいかしら？

「性能にもよるけど……5分位？」
「俺たち二人がかりならそれが妥当だろ」
　頼もしいわね。
「はい、キョーマの武器」
「サンキュ。……これ、串に見えるんだが……」
　確かに金串はないでしょうに。
「高密度プラズマと硬化金属による特殊表面処理を施したレアメタル合金製の試作品。基本投擲と体術を駆使するあんたにゃそれで十分でしょ？狼サン」
「確かに理にかなってはいるが……他に無いのか？」
「スピンダーツ使う？被害拡大するけど」
「却下だ」
「なら大人しくそれ使え」
　話は纏まったわね。
　この先の宝物庫に対象はいるわ。
　仕事を始めてちょうだい。
　アタシは此所で待ってるから。
「了解。サクッと終わらせよう」
「終わったら、酒飲みに行くぞ」
「待てゴラ、私未成年」
　ｓｉｄ　ｏｕｔ
　銅雀台。
　それは裏のビジネスで大成功をおさめた中国の幹部、雀上将が作り上げた城である。
　しかし、クーデターにより追われた雀上将の最後の砦となったが、火を放たれ上将は一酸化炭素中毒によりあっさりと死亡してしまった。
　これで終れば良かったのだがそう上手く行かないのが世の常だ。
　偏執的な少年趣味の雀上将のお気に入りにして、大金を積むに積み上げて作られた軍用スペックのアンドロイド〝四（スー）〟。
　少年の姿をしたそれは最後の命令を実行し続けていた。

その命令とは則ち〔私と私の宝物を守れ〕である。
これにより誰も宝物庫に近付く事が出来ずにいた。
だが、その快進撃は続く事は無くなった。
何故ならば……
「足引っ張っんじゃねえぞ」
「そりゃこっちの台詞」
最強の超人部隊の生き残り2名が相手なのだから。
この4分後、四はコイルを奪われ機能停止したのであった。

始まりの足音

あの作戦から五年が過ぎた。
私は3年前に左目を負傷、義眼（アナティカルエンジン）を移植した。
アルベルトの野郎に関しては知らない。
管理局でセコセコと働いている事だろう。
博士は2年前に私の論文の一部をもって姿を眩ました。
キョーマは回収屋として、私とコンビを組んで活動している。
まあ、依頼によっては手分けして取り組むときもあるが。
キョーマは原作通りに廃棄されたガソリンスタンドを改装して住み着き、表向きは時代遅れのガソリン車のレストア業者をしている。
私はコンテナを持ち込み改造して同じ敷地内に住んでいる。
まあ、コイル嫌いのキョーマの為にＷｉｉｌ，ｏエンジンから直接電源を取っているが。
私？
表向きには情報屋、フリージャーナリスト、何でも屋として活動している。
たまに建築設計をしてくれとか、ファッションデザイン考えてくださいとか依頼来るんだけどね。
でだ。
先に言った通り、キョーマはコイル嫌いだ。
身近にコイルを使用した製品を置かないほど徹底した極度なコイル嫌いだ。
だから、コイルを使用した携帯も……、
――ピピピピピピ――
ほら、ガレージから離れたドラム缶の上に置いてるし。
「こんな所、あの悪ガキ共しかそうそう来ないけど、盗難しても知らないよ。しかも雨ざらしかよ」
「うるせえ、ほっとけ」
それよりも早く電話出た方いいよ。
どうせマリーさんだろうけど。

「分かってるよ。
――ピッ――
オレだ」
それにしてもアレはドコ行ったのかな？
私とセイラ博士の合作にしてあの娘の為だけに造ったオンリーワン。
開発ロットＷＯＳ＆Ｒ―００
試作全身義体（プロトフルサイバネティック）
アクセサリ製作ノウハウを投入して製作したオリジナル。
あの事件以降アンドロイドにするとは聞いていたけども、結局動き出す所を見れなかった。
完成したら連絡をくれると言っていたのに…。
その上、士堂博士が行方不明となっている…。
物凄くキナ臭いな。
それに、〝セイラスタイル〟としてＯＷＳＳと言うロットが振られた個体が製作されている。
機会が有れば、オリジナル意外全部……破壊シツクシタイナ。
「オイ、恐ろしい表情してんぞ」
あらごめんなさい。
で、何だって？
「仕事だ。今夜だとよ。時間ぐらい指定しやがれってんだ」
だと思った。
ん（　―・）？
こんのガキ共、性懲りもなく遊び来やがってぇ。＃＃＃＃＃＃
「クォラァ！ガキ共！」
「「「わーーっ♪」」」
……逃げてった。
……それも楽しそうに。
……いい加減業者呼ぼうよ。
……そんで不法投棄車両片付けよ？
死人か怪我人が出る前にさ……。

「そうだな……それよりも２１００までに行くぞ」
アイアイ、バディ。

さぁて、物語を始めよう。
コイルをメグル殺伐とした物語を。
それは憎しみか？
それは悲しみか？
それは怒りか？
それは快楽か？
それは喜びか？
それは希望か？
それは絶望か？
まあ、いずれにしろこの物語は紡がれる。
そこには残酷な真実しか無いのかもしれんがね。
それを紡ぐのは君たち次第。
我々は傍観者に過ぎないのだから。

依頼

午後9時
2100―バーmary's―
相変わらず闘(ヤ)ってるねぇ。
闘技場。
「フン」
あらら、ご機嫌斜め。
「当たり前だ。下らなさすぎる」
そりゃそうだ。
それより、正面注意。
「あ？」
――ドゴッ――
「ゴベッ」
――ゴロゴロドサッ――
ほらね、正面注意。
大方軍用スペックのフォーにヤられたんでしょ。
「だな」
――グシャ――
「グフ」
――メメタァ――
「ガハ」→昇天(チーン)
案の定フォーにヤられたのね。
で、原因は？
「簡単な話さ。力が自慢だって言うからフォーとやらせた」
只の馬鹿ね。
「つーか軍用スペックだろうが、コイツ」
「バカにつける薬は無いからね、体で解らせた方が早い」
「て言うかリア、トドメ刺すなよな。ナチュラルに」
つい癖(テ)でヤっ(ペ)ちっ(ロッ)た。
まあ、それ以前に民間用で軍用、ましてや不正コイルには勝てないし、回収屋としての常識を疎かにし、魔女の挑発に素直に乗った馬鹿

が悪い。
「その通りだな」
「座りな」
今回の以来内容は？
「ジョニー・ウォンとエバリー・ウォン。旧市街を根城にしている兄弟。コイツらが不正コイルを複数仕入れたって情報が入った」
うわお、けっこう奮発したねぇ。
でも、『日陰街（ひかげがい）』か…、面倒だなぁ。
「ああ、不法入国者やならず者共の巣窟だな。コイルの使用目的は？」
それ、聞くまでもないよね。
殺しとか、ロクでもないことしか思い浮かばないけど。
「大方そんなもんだろ。新しい情報が来るのを待ってもいいが、余所の者に先を越されかねない」
「だな」
同感。
あ、報酬はいつも通りでお願い。
「ああ、キャッシュとガソリン半々で」
「解ったよ。
本当に変わり者だよ、アンタ達。……でも、アタシは評価する。世界中の誰よりもコイルの怖さを知っていることを。それに、コイル嫌いのアンタ達が生きていけるのはアタシのおかげだ。フフフ、期待してるよ。マブチ・キョーマ。リア・カークライト」
―バーｍａｒｙ，ｓロータリー―
「魔女め」
生活習慣病で死ぬんじゃない？
主に内臓脂肪が原因で。
「はっ、だとしたら愉快だな」
――キュヒュヒュボルルン――
「さっさと片付けるか」
超賛成。
――ボボボボボボボ――

干しイモ食う？
「お、サンキュ」

此処からだ。
この日からだ。
物語の始まりだ。
コイルをメグル果て無き争いの始まりだ。
さあ、傍観者の紳士淑女の諸君。
前座は終わりだ。
ショーは始まったばかり。
望む結末は来るのか。
その結末は希望か？
それとも絶望か？
それでも、どうなるかは神様も解らない。
今いる道の先は、自分の足で切り開き進むしか無いのだから。

日陰街

旧市街地。
通称『日陰街』。
化石燃料時代の名残であるこの場所は、今や不法入国者やならず者共の巣窟と化していた。
無論、アウトローだけでなくホームレスや何らかの理由で移り住んだ人々が暮らしている。
―旧市街地　廃墟ビル―
「ギャッハッハッハッハ、まあ見ろよコイツを」
そう言ってテーブルの上に置かれたのは電動式の水鉄砲だった。
それを見た構成員の反応は当たり前のものだった。
「……ただの水鉄砲じゃない、電動の」
「オウ！」
「コレがまさかオレ達の切り札とか言うんじゃねぇよな、ジョニー！」
「ヴァーカ！そのまさかよ。正にコレがオレ達の決戦兵器だ！」
落胆の大きい構成員を無視してジョニーは話を続ける。
「いいか！強化されたポンプ！大容量タンク！正に無敵！」
そしてポケットから徐に取り出したソレを見せ付ける。
「そして！ついに手に入れた不正コイル！コイツを使えばな」
不正コイル。
次元の表層からではなく表層の深い所からエネルギーを取り出す危険な代物。
此処で一つ説明しておこう。
コイルには４種類と例外的なモノが存在する。
まずは四種類の方からだ。
最初期に造られたコイル。
『βコイル』。
ソレ意外の呼び名は『マイクロゲート』若しくは『ＭＧ』。
現在の名称は『ナンバーズ』。
次元Ｗの深淵、未知の領域から膨大かつ強大なエネルギーを取り出

し、暴走時には島一つを巻き込むほどの被害を出す場合がある。
全てで３００個ほど造られたとされているが、世界に６０基あるタワーが完成した直後に大半は回収された。
現在民間に出回っている正規のコイル。
世界に６０基あるタワーの監視のもと表層の薄皮の部分から安定したエネルギーを取り出している。
犯罪に使用すると即座に停止される。
軍用に造られた高出力のコイル。
最初から軍事使用目的で表層の中間地点からエネルギーを取り出す事が出来る。
戦場では、規制がどうのこうの言っている間に人が死ぬため、躊躇いもなく攻撃できるよう、一部のリミッターが外されている。
違法なほどエネルギーを取り出す事が出来る不正コイル。
次元の表層の最深部、あるいは深層の上部から膨大なエネルギーを取り出す事が出来る。
リミッターが一切かかっていない為、暴走する危険性が高い。
共通事項として、稼働時は青く光り、寿命がくると紫に光り、暴走し始めると赤く光り出す。
次に例外的なコイルを説明しておこう。
と言っても、教えるのは１つだけだがね。
『Ｗｉｌｌ，ｏコイル』。
リアは『種』と呼んでいる。
製作時期は『ナンバーズ』とほぼ一緒。
次元Ｗの深淵から取り出したエネルギーにＷｉｌｌ，ｏ―「意思を持った電気信号」―を取り込んだ特殊なもの。
用途は先に紹介したコイルと何ら変わりはない。
暴走する危険性は無く、その上、タワーの監視下に入っていない。
リアはもう一つ『棺』と呼んでいるモノがあるが……まあ、コレは何時か話すとしよう。
さて、話は戻る。
不正コイルの存在を知った彼等は目の色を変えた。

「本物か？」
「つーか最初にソレを見せろよ！」
「それよりも、よく手に入ったな」
「高い買い物だったぜぇ。見ろ×印付けなきゃ正規モンと見分けも付かねえ。ひと粒３００万の輝き」
そう言ってケースから一つ取り出し、水鉄砲に装着した。
そして、その銃口を部屋の角に置いてあるウォーターサーバーに向けた。
「コレが…制限（リミッター）が一切掛かって無い…コイルの本当の力‼」
たった一発撃っただけでサーバーのタンクは吹っ飛んでしまった。
しかも、殺しをしたところで、一切証拠は残らない。
何せ、弾は水なのだから。
その事にジョニー達は沸き上がり、意気揚々に談笑を再開するのであった。
梁の上に二人の男女が居ることに気が付かないまま……。
ｓｉｄキョーマ
ひい、ふう、みいの……全部で１２か……。
「ゴロツキの癖によく集めたねぇ。感心するは」
ああ。
だが、無駄な投資になっちまうがな。
さっさと終わらせるぜ。
「っ、待った。誰か来た」
!?
「エバリー・ウォン。担いでるのは…女？」
人攫いか？
「多分……ん？」
どうした？
「いや、なんでもない。」
はぁ。
そうか。
やれやれだ。

――ヒュッ　ドスッ――

「誰だ！」

勘違いするなよ？

その女はオレ達の仕事とは全くの無関係だ。

オレは回収屋だ。

怪我しねえ内にその不正コイル、大人しく差し出せ、小僧（ガキ）共。

「舐めんじゃねぇ！」

――ヒュッ　ザクザクッ――

「痛えええええええ！」

「ジャストミート♪」

ナイスだ。

さて、ソイツは元々オマエらの手に負えるシロモノじゃねえんだ。

オマエらみたいなバカの自由にさせないために、ニューテスラがキツイ縛りを掛けてんだろうが。

「そうそう。用法要領を守って使いましょう♪さもないと……コイルに喰われるよ？」

「う…うるせえ！野郎共！さっさと出てこい！コイツらを生かして帰すんじゃねえぞ！」

話を聞くような連中じゃねえか。

なら、腕ずくで奪うまでだ！

「オッケー♪壁と床の染み経由でブタ箱に突っ込んでやる！」

ｏｕｔ